

2018 年度学生委員会報告書

公益財団法人 日本財団学生ボランティアセンター

2018 年度学生委員会

I. 学生委員会の目的

学生委員会（以下、「委員会」という。）は、公益財団法人日本財団学生ボランティアセンター（以下、「センター」という。）定款第 45 条の規定による専門委員会として、学生の様々な意見を取り入れるために設置している（規 14 号 第 1 条）。センター事業に関する助言又は提案を任務としている（同 第 2 条）。

II. 学生委員

本年度の学生委員（以下、「委員」という。）は、2018 年 6 月 5 日に行われた第 13 回理事会において選任された。委員は、センター実習生、大学ボランティアセンター学生スタッフかつ地方大学在籍者、留学生、センターのプログラム参加者、ボランティアに精通している者の 6 名である。委員の選任理由は以下の通りである。

- ・ 関 浩明（立教大学法学部法学科 3 年）* 委員長

本年度よりセンター実習生。これまで福井県や宮城県でのボランティアを経験、山梨県でのイングリッシュキャンプや大学の留学生向け企画にも参加した。本人に学生委員を希望する強い意思があり、委員長としての活躍も期待できるため。

- ・ 大谷 夏子(中央大学文学部人文社会学科 4 年)

中央大学ボランティアセンターに所属する面瀬学習支援の元代表であり、宮城県気仙沼市にて NPO と協力して、子ども・コミュニティ支援を行った。また、東北や熊本にて 30 回以上の活動を行うなど、ボランティアに関心がある学生のニーズや動向についての情報が期待できるため。

- ・ カトリ ラメス(神戸国際大学経済学部経営学科 3 年)

ネパール出身であり、大学コンソーシアムひょうご神戸主催の外資系企業によるグローバル人材育成プログラムに参加し、プロジェクトメンバーとして企画運営を担当した。地域で日本人と留学生との国際交流企画を経験しており、留学生かつ近畿の学生として、センターの大学生ボランティア支援への意見が期待できるため。

- ・ 熊谷 麻那(宮城教育大学教育学部 3 年)

チーム「ながぐつ」プロジェクト福島、チーム「ながぐつ」プロジェクト熊本地震ボランティアに参加し、これらに参加した同年代の学生たちとともに、2 回のワークショップを企画・実施した。東北の学生として、またセンター事業参加者としての視点での意見が期待できるため。

- ・河野 誠也(熊本学園大学商学部経営学科4年)

熊本学園大学ボランティアセンターに所属する Laugh Connect 現代表であり、熊本県上益城郡益城町にて NPO や他大の学生と協力して、子ども・コミュニティ支援を行っている。九州の学生として、地域のボランティアに関心がある学生のニーズや動向についての情報が期待できるため。

- ・瀬戸 瑞紀(聖心女子大学大学院文学研究科修士1年)

聖心女子大学 SHOC project 元代表であり、大学内や福島県にて活動を行った。また、こども学習支援、自然体験活動、都立病院小児病棟など様々なボランティアを経験しており、ボランティアに関心がある学生のニーズや動向についての情報が期待できるため。

III. 開催概要

委員会を3回開催した。2回をセンターにて、1回を合宿形式で東京の施設にて開催した。3月中に4回目を開催予定である。開催の日時・場所は委員会で検討の結果、決定した。

第1回委員会

日時：2018年7月16日(月)15:40~17:40

場所：センターミーティングスペース

参加者：委員6名、職員1名

議事要旨：・委員へのセンター設立趣旨・事業概要説明と質疑応答

・各委員より自身のボランティア活動についての説明と質疑応答

・本年度委員会で扱う審議事項の検討

第2回委員会

日時：2018年10月27日(土)12:15~15:35

場所：センター6階会議室

参加者：委員3名(関、大谷、カトリ)、職員1名

議事要旨：・センター事業についての意見交換

・ボランティア未経験学生を活動させるための方法

第3回委員会

日 時：2018年12月23日(日)13:30～12月24日(月)15:00

場 所：国立オリンピック記念青少年総合センター

参加者：委員5名（大谷、カトリ、河野、関、瀬戸(23日のみ)）、職員1名

議事要旨：・委員個々人の活動の悩みや課題についての共有と意見交換

・センターへの提案内容についての意見交換

第4回委員会(予定)

日 時：2019年3月下旬

IV. センター事業への意見および提案

委員会では当初、ボランティアを経験したことの無い学生にボランティアさせるためにはどうすれば良いかについて意見交換していた。しかしながら、委員会を重ねるうちに、委員のうち3名がプラチナ未来人財育成塾（以下、「育成塾」という。）へ学生チューターとして参加したことや、同じく委員3名がボランティア・シンポジウムに参加したこともあり、「プラチナ未来人財育成塾への学生チューター派遣」と「ボランティア・シンポジウム」の2事業を中心に意見および提案をまとめることとなった。2事業ともに、学生・学生団体の活動にとって有意義であり、ボランティアに携わる学生の活動を支援する観点からも評価できるとの意見があった。ただし、委員の目線では、参加したからこそ見えてきた課題があり、改善に向けての工夫が必要であるとの認識に至った。以下の意見および提案には、次年度からの反映が難しいこともあるだろうが、検討を願う。

1. プラチナ未来人財育成塾への学生チューター派遣について

プラチナ構想ネットワークが主催となり、次の世代を担う中学生が未来への夢を持って取り組む精神とリーダーの素質を身に着けるために開催されている。本年度は、中学生85名が参加して東京都市大学二子玉川夢キャンパスにて8月5日から8月9日にかけて4泊5日で開催され、センターは26名の学生チューター派遣を行った。

① 評価できる点

・学生チューターがグループワークで話し合いをサポートすることで、産業界、研究・教育機関、行政の各分野で活躍する講師陣による専門的な講演への中学生の理解を深めることが出来た。

② 意見・提案

・学生チューターが育成塾のどこかのタイミングで、全体ファシリテーターなどの役割を担うことで、学生自身の成長と育成塾の充実を図る。

- ・チューターとして留学生はもちろん、ディスアビリティを持つ学生や性的マイノリティの学生に参加を促す。身体に障がいを持つ学生は「チームながぐつプロジェクト福島」など野外活動が中心となる事業への参加は難しいかもしれないが「プラチナ未来人財育成塾」は参加可能であると考えられる。センターのミッションを踏まえると、多様な学生がボランティアに参加する事を支援していく必要があるため、多様な学生に配慮したwebや受付方法にする。

2. ボランティア・シンポジウム

大学の地域性という枠や専門領域を超えて、学生が主体的に学び・考え・行動する力を身に付けるために開催している。今年度は、センターとの協定締結大学の学生をはじめ合計55名が参加して、国立オリンピック記念青少年総合センターにて、2月11日から2月12日にかけて1泊2日で開催した。

① 評価できる点

- ・参加者の64%が1年生もしくは2年生で、学外でのイベント参加が初めてという学生も多く、今まさに学生ボランティア活動をする上での様々な課題を抱えている学生のニーズに合致する参加者同士の交流、意見交換が図れる内容が数多く用意されていた。
- ・交通費を昨年度までの全学補助から一部補助に変更したことで、自己負担でも参加するというように学生の参加意欲が高まった。

② 意見・提案

- ・参加者が1人1分間で自己紹介と活動紹介を行ったが、時間が短く、他参加者によるフィードバック用紙への記入も進まなかった。発表だけではなく、参加者同士が情報共有を図れるような仕組みとして、個人が特定できない参加団体名簿や、当日会場のみに掲示する自己紹介シートなどをつくる。
- ・後輩への引継ぎや、ボランティア体験を振り返り今後のキャリアに活かすというような、3年生や4年生向けの企画を実施する。

3. その他の意見と提案

- ・留学生もセンターの事業に参加しやすい環境を整えるため、センターwebの一部を英語で表記する。
- ・センターに対する寄付を拡充するため、センターwebのトップページに寄付バナーを設置する。

V. まとめ

委員は、3回の委員会を中心に意見交換を行い、委員会として本報告書をまとめた。各委員は、センター事業に参加することにより、徐々にセンター事業の価値や課題を見出した。また、そこから得られた学生団体の抱える課題や対策についての気づきを、委員自身の新たな学びに生かしていった。さらに、委員同士や委員とセンター事業参加学生との新たな繋がりも生まれた。一方で、委員会で意見交換されたものの、結論が出ないものも多くあった。その一つが今後の学生が災害ボランティアとして果たす役割についてである。センターの「全国学生1万人 ボランティアに関する意識調査2017」において「緊急災害支援」が最も興味があるボランティアの分野であり、委員のうち5名が緊急期及び復興期の災害ボランティアを経験している。今後も異常気象などによる多くの災害が懸念される中、学生ボランティアの被災地での活動やその情報発信といった既存の活動以外の役割について、次年度以降の委員会でも検討を願う。今後も委員会での議論が活発に展開されていくことに期待して、本報告書のまとめとする。